

「教職実践演習」と授業について

The Case for Improving the Way Students Learn in the Classroom
Through the Subject ‘General Practice in the Teaching Profession’

細川 裕司*

Yuji HOSOKAWA

Abstract

Every teacher wishes to improve the way children learn in the classroom. “What we learn with pleasure we never forget.” says Frieda Hall, an educator who taught every kind of social studies subject from seventh through twelfth grade. In the classroom, teachers must make efforts to keep students’ attention throughout the class. One of the best ways to attract and maintain their attention is enjoying the class. The feelings of fun and enjoying a class often comes when something surprising and interesting takes place. So making unexpected and different things happen is really beneficial for learning in the class. If they just sit passively, they will not absorb any information. In addition, the more teachers talk, the less interested students will be in the subject and in the class.

The Central Council for Education in Japan has issued a report titled “Redesigning Compulsory Education for a New Era.” One of the main targets is fostering trusted and high-quality teachers, because the success or failure of education depends on the ability to secure talented and capable teachers. The concrete strategies are: adopting a teacher certification renewal system, improving and refining the hiring process and enhancing in-service training, improving and enhancing teacher evaluation and so on. The report directs us to foster teachers with passion, good teaching skills, and good character.

There are some ways to enhance students’ motivation toward learning. Anyone knows that repetition and reproduction do not just lead students to memorize information and knowledge, but strengthen their internal motivation and attention. Class activities can absolutely develop a positive attitude towards learning in the end. Such activities must be done to attain good results in class.

1. はじめに

本研究の目的は、教職課程4年次科目「教職実践演習」を履修する教員の卵にとって、授業とはどうあるべきかについて考究することにある。「教職実践演習」は、教職履修科目のひとつである。将来教員になる上で自分の課題が何であるのかを自覚し、教職授業で培った知識や技能等を補うことで教職生活をより円滑にスタートさせることを目的としている。

「教職実践演習」においては、教員として求められる4つの事項(①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項)を含めることが適当であるとしている⁽¹⁾。これ

らの中で、教育実習や実践的指導力と最も関わりを有するのが④の教科・保育内容等の指導力に関する事項である。

本学教職課程では、毎年度末、『教育実習のまとめ』と題する教育実習の成果を冊子にまとめ、発行している⁽²⁾。表1に示したのは、その一部である。多くの教育実習生は、予定通り授業を進めることができなかったと述べている。時間内で指導内容を伝え理解させることの難しさを痛感している。

教員の質の向上について、2005年の中央教育審議会答申⁽³⁾、「第2章優れた教師の条件」で3つのことを指摘している。一つは教職に対する強い情熱、次に教育の専門家としての確かな力量、三つ目は総合的な人間力である。授業という視点から、

* 北海道科学大学高等教育支援センター高等教育支援部門

表 1 教育実習のまとめ(感想)

- ・実際ではなかなか授業を思うとおりに進められず、予定したところまで終わらせることがなかなかできなかった。そのため単元全体の進行が遅れてしまうことや、もっと細かく教えたいところを教えることができなかった。
- ・説明する内容を全員が解るわけではないので、理解の進まない生徒には机間巡視の際に説明をした。そうすると、いつの間にか予定時刻を過ぎていることが多々あった。

教育実習生にとって関連のある項目は、二つ目の「確かな力量」である。そして教員に求められる力量の中で、特に大切なのは授業力である。授業で勝負できる教師、授業を大切にできる教師が学校現場でとりわけ必要とされている。そのような教師は生徒にとって魅力的な教師でもある。そのことを端的に示しているのは教員採用試験の選考方法の多様化である。公立高等学校の多くの教員採用二次試験では、実践的指導力を観察できる試験方法として模擬授業や場面指導が受験生に課されている。即戦力となる人材が求められている。

それでは、採用される側、つまり、教職課程を履修している大学生が考える魅力的な教師と、授業を受ける側の高校生が考える魅力的な教師について考察してみる。そして、この考察を通して、教師はいかにあるべきかについて考えてみたい。

2. 方法

教職科目「教職実践演習」を履修する4年次学生、および現役高校生に対して、魅力的な教師とその理由についてアンケートを実施した⁽⁴⁾。

対象は、「教職実践演習」履修者4年生29名と札幌市内の高等学校2年生30名、3年生28名の計87名である。表2は質問項目である。

3. 結果と考察

アンケート結果から、教育実習者としての大学生は、「生徒の目線に立って生徒のことを理解する」など共感的理解のことができることが教師には必要であると48%が考えている。一方、授業を受ける高校生は、「わかりやすい授業をしてくれる」(47%)、「話し方がうまい」(41%)、そして「楽しい授業」(38%)ができる教師を求めていることがわかった。結果から見える特徴は、大学生は教え方よりも人柄を重視していることである。これは、仕事

表 2 学習者アンケート(質問項目)

- Q: あなたにとって魅力的な先生とはどのような人でしょうか? そう思う順番から1~10の番号で教えてください。
- ・元気があり、意欲的である。
 - ・楽しい授業をやってくれ、あきさせない。
 - ・授業で生徒の心を引き付けることができる。
 - ・授業での話し方がうまく引き込まれる。
 - ・教科書の要点を記憶に残るように教えてくれる。
 - ・生徒を授業に参加させるのが上手である。
 - ・質問に的確に答えてくれる幅広い知識がある。
 - ・わかりやすい授業をしてくれる。
 - ・生徒のことを理解しようとし、生徒の目線に立つ。
 - ・生徒を公平に扱ってくれる。

としての教職を意識した立場からの発想なのであろう。授業技術というよりは、大局的で全人的な資質、つまり2005年中教審答申の三つ目の総合的な人間力の必要性を求めている。一方、高校生は授業での教え方の上手な教師に圧倒的な魅力を感じている。上級学校への受験を控えた高校生の切実な願いが感じ取れる。

4. 今求められる授業力

思想家であり教育家であった内村鑑三⁽⁵⁾は、アメリカでの留学中に、「語学は数学に次ぎてもっとも乾燥無味なる学課なり。之を教ゆるに多量の堪忍を要す。教師の善悪は最も明白に語学攻究の際に識るを得べし。語学を面白く教へ得る教師は教師の職に堪ゆるものなり。」と述べている。授業は面白くないもの、そのため、教える教師には忍耐力が必要である。そして特に、数学や英語といった科目においては、授業を「面白く」教える資質能力が求められると内村は指摘した。また、米国の教育家で作家のヘレンケラー⁽⁶⁾は、「He will not work joyfully unless he feels that liberty is his.」(子どもにとっては学びに自由がなければ楽しくない)と述べている。サリバン先生によって、自由な学びで能力を開花したヘレンケラーは、強制からは本当の学ぶ喜びは生まれないと述べている。

面白い、わかりやすい授業を実践している国として注目されているのがフィンランドである。経済協力開発機構(OECD)が実施しているPISA(国際学習到達度調査)やTOEFL(英語能力測定テスト)において、フィンランドの子どもたちは世界的にみて、常に上位の成績を収めている。

フィンランドの授業の特徴は、生徒に自分で学ぶ科目を選択させ、科目の課題を自力で解かせることに力点を置いている。教師はサポート役に徹する。単に、試験の成績向上に目を向けるのではなく、生徒の自己達成感を育むことに主眼を置く。そのため、小学校でも本人が希望すればもう一度同じ学年で学ぶことができる。留年が可能なのである。生徒の「なぜ？ どうして？」の声に十分、耳を傾ける。「頭で理解しただけでは、人間の理解は浅いものにしかない。本当に理解するには、それを実践する必要がある⁽⁷⁾」からだ。このような、個を大切にしたい教育と学習への好奇心を育てる教育システムが、最終的にわかりやすい授業へと繋がり、結果としても示されることとなる。

ただ、そのようなフィンランド教育が自主性を尊重するからといって生徒にすべて任せているわけではない。それぞれの発達段階においてタスクが用意されている。その一つの例として英単語の語彙数がある。フィンランドは小学校では3年生から6年生までの4年間、中学校で3年間、計7年間、英語の授業が行われている。タスクとしての総語彙数は7,366語である。一方、日本では、小学校5年生から高校3年生までの8年間で、3,285語である⁽⁸⁾。比較すると2倍以上の語彙量である。このことから、フィンランドでは決して記憶(memorization)すべき学習量が少ないわけではない。むしろ日本よりもはるかに多い。個々人が自主的にタスクを消化することが教育課程の中に組み込まれていることに大きな特徴がある。教える側の目指すべきものは、児童生徒の個を大切にしたい、好奇心を引き起こす授業を実践することである。

生徒の好奇心を引き出すには、授業中の教師の話す時間と因果関係がある。「フィンランドの授業で、教員が50分間、生徒の前で中心となって授業を行っているのを目にすることはまずない⁽⁹⁾。」フィンランドでは生徒中心の授業展開だからだ。生徒が教員と相談しながら自分の取り組みたいターゲットを定め、ターゲットを達成するためのタスクをこなす。そういうわけで、フィンランドの授業では教師が授業で話す時間は40%以下とされている。授業が講義調になれば、生徒の授業への関心は失われる。アメリカの授業時間の研究⁽¹⁰⁾によると、生徒の授業へ集中できる時間は最大でも15分である。教師中心ではなく、生徒が主役とな

り生徒自らが自分の課題を見つけて取り組むことで、学習への興味・関心が生まれ、学ぶ喜びと自主性が育つこととなる。

5. アクティブな授業を求めて

次は、積極性や好奇心を引き出すことを意識した、英語の授業について考えてみる。

一つ目は語彙の習得についてである。英単語を覚えることは英語の出発点であるものの、多くの学習者にとっては乗り越えることがむずかしい大きな壁となっている。「単語をどう覚えるかといった、学習の中でも最も基礎的な『学び方』でさえも、我々ははっきりとした方法を確立していない。…確かに、振り返ってみると、我々は小学校や中学校で、先生から『ここは大切だから覚えておきなさい』とは言われたが、どう覚えるかについては、ほとんど指導を受けていない。教師が行っていることは知識の提示であって、それをいかに吸収するかと言う「学ぶ技術」に関しては、完全に学習者任せてあったのだ。」と羽根氏は述べている⁽¹¹⁾。教師は覚えるべき単語のスペリングと意味だけを提示するのではなく、単語の語源や使用例を説明し、学習者のイメージを膨らませる工夫が必要だ。さらに、パワーポイントやハンドアウトで反復練習の機会を与えることも求められる。つまり、理論としての知識を与えるだけでなく、生徒が考え、生徒自らが実践するための時間を与え、成果を発表する機会を提供する必要がある。そして、その場は教室であり、それを企画し、誘導するのが教師の役目なのである。

また、授業の工夫として、教える側が授業の中に意外性や思いがけないものを忍び込ませることが学習者の興味を引き起こすことに繋がる。そのためには、授業者は、授業が単調にならないように常に配慮し、いつもとは違った、これまでの授業のやり方とは異なるものを授業の中にさりげなく埋め込む努力を怠ってはいけない。授業者の冒険心と学習者のチャレンジ精神が絡み合ってはじめて、授業での快い緊張感と充実感が生まれ、学習者に自己有用感を与えることができる。

6. おわりに

中教審は、2012年に「学び続ける教員像の確立」について答申した⁽¹²⁾。

この答申は、教員の資質能力の向上を意図した

ものである。その下支えとなっているものは、1998年の教員免許法の改正であり、その際に、「教育相談」の強化、「外国語コミュニケーション」および「情報機器の操作」が必修化された⁽¹³⁾。

現役高校生が求めるのは、「わかりやすい授業をする」教師である。教育とは、生徒の可能性を最大限に引き出す行為である。その手段として、個に応じた指導や生徒が主役の授業づくりが必須なのである。

生徒が額に汗するなしに充実感を覚えることはない。確かに、教師が生徒に知識を伝えることは必要である。しかし、授業の大半をそのことに使うとしたら、生徒に学ぶ楽しさを体感させることはできない。なぜなら、皮肉なことに、教師が語れば語るほど、生徒は授業に興味をなくすからである。さらに敷衍すれば、教育実習生が授業内容を生徒に教え込もうと努力すればするほど時間がかかり、指導案通りに進まなくなる。一方で、生徒は授業内容を理解できなくなっている。大切なのは、いかにして生徒を内面的に揺さぶること、汗をかかせる工夫を創り出すかである。

教育実習の参観授業でよく見かけるのは、実習生が板書をして生徒が書き取るというやり方である。実習生は板書に時間がかかり、生徒は書き取することに必死だ。「工業」の授業なのに漢字やひらがなを書き取る「国語」の時間となっている。生徒が思考する時間はきわめて少ない。ひたすらノートをとる忍耐の時間となっている。「英語」の授業であれば、英語の授業なのに英語を話したり、書いたりする言語活動の時間がほとんどなく、英文の内容を日本語に直すことが中心となったり、日本語訳を理解する時間となってしまっている。「工業」そのもの、「英語」そのものを理解した上で実践へと進めていくことが本来の能動的な(active)学習への第一歩なのだが、授業は苦役となっている。そのような授業からは好奇心は生まれない。そうならないために、教師は授業での話す時間を少なくし、その分生徒が思考する時間を増やすように工夫し、応用としての活動の時間を十分確保する必要がある。そうっていない場合は、生徒の心が授業から離れていってしまうことになる。

教師の役目は、生徒に学習後の充実感を持たせることにある。その方策として、「生徒に基礎的なタスクを与え、体験させ、進歩が目に見えるよう

にし、かつ進歩向上を実感できるように手助けすること」⁽¹⁴⁾にある。そのためには、生徒に授業内容の理解のための時間、思考のための時間、実践的な練習の時間を十分に与え、その成果が見えるように授業を構築することが必要である。そのような授業こそがこれから求められる授業であり、それを可能にするのは確かな力量をもった教師だけである。

【参考文献】

- (1) 文部科学省,「平成 18 年の中央教育審議会の答申」
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kyoin/1268600.htm, 2006
- (2) 北海道科学大学教職課程,「教育実習のまとめ」, 北海道科学大学, 2015, pp. 1-44.
- (3) 中央教育審議会答申,「新しい時代の義務教育を創造する」, 文部科学省, 2005, 第 2 章.
- (4) 細川裕司,「平成 27 年度工学教育研究講演会講演論文集」, 公益社団法人工学教育協会, 2015, p.505.
- (5) 内村鑑三,「内村鑑三著作集」, 岩波書店, 1953, 第一巻 p.254.
- (6) Helen Keller, “The Story of My Life,” Dover Publications, 1903, p. 20.
- (7) 樋口裕一,「教える技術の鍛え方」, 筑摩書房, 2009, p.122.
- (8) 伊東治己,「フィンランドの小学校英語教育」, 研究社, 2014, p.7, p.54.
- (9) Linda Darling-Hammond,
“What we can learn from Finland’s successful school reform,” 2010, issue of Rethinking Schools, Volume 24, Number 4. Great Public Schools for Every Student,
<http://www.nea.org/home/40991.htm>
- (10) TIME, “Why Long Lectures Are Ineffective”, 2012, <http://ideas.time.com/2012/10/02/why-lectures-are-ineffective/>
- (11) 羽根拓也,「限界を突破する学ぶ技術」, サンマーク出版, 2004, p.16.
- (12) 赤星晋作,「新教職概論」, 学文社, 2014, p.46.
- (13) 小島弘道,「教師の条件」, 学文社, 2008, p.38.
- (14) Jeanne Ellis Ormrod, “Educational Psychology,” University of Northern Colorado, 1998, p.480.